

戦争平和教材をどう授業しているか

—詩「挨拶—原爆の写真によせて」(石垣りん)の授業—

五十嵐 淳

一 中学校国語教科書掲載の戦争平和教材

現在私が勤務する中学校(新潟市)が使用している光村図書 of 教科書には、次のような戦争平和教材が掲載されている。

【中一】

○「大人になれなかった弟たちに……」(米倉斉加年・物語)

【中二】

○「字のない葉書」(向田邦子・随筆)

【中三】

○「挨拶—原爆の写真によせて」(石垣りん・詩)

「エルサルバドルの少女ヘスース」(長倉洋海・記録)

「二つの悲しみ」(杉山龍丸・記録)

(○印が読解教材。他は巻末に掲載されている読書教材)

他に、中二の読書案内として以下の本が紹介されている。

「アンネの日記」(アンネ・フランク・日記)

「綾瀬はるか『戦争』を聞く」(綾瀬はるか・記録)

「弟の戦争」(ロバート・ウエストール・物語)

「ガラスのうさぎ」(高木敏子・物語)

「ぼくの見た戦争」(高橋邦典・写真絵本)

「生きのびるために」(デボラ・エリス・物語)

「夕風の街 桜の国」(ここの史代・漫画)

中一から中三まで一つずつある読解教材については、もちろん丁寧に授業を進めているつもりである。また、

読書教材もすべて生徒に読ませている。時間の問題などで詳しく扱うことはできないが、私なりに簡単にコメントし、できるだけ戦争や平和の問題に目を向けさせたいと考えている。

二 中三詩教材「挨拶」

一 〇三年にある読解教材のうち、全文掲載可能な「挨拶」の授業について述べてみたい。まずは教材を紹介する。

挨拶―原爆の写真によせて

石垣 りん

- ① ①あ、
- ② この焼けただれた顔は
- ③ 一九四五年八月六日
- ④ その時広島にいた人
- ⑤ 二五万の焼けただれのひとつ
- ⑥ すでに此の世にないもの
- ⑦ とはいえ
- ⑧ 友よ
- ⑨ 向き合った互の顔を
- ⑩ も一度見直そう
- ⑪ 戦火の跡もとどめぬ
- ⑫ すこやかな今日の顔
- ⑬ すがすがしい朝の顔を
- ⑭ その顔の中に明日の表情をさがすとき
- ⑮ 私はりつぜんとするのだ
- ⑯ 地球が原爆を数百個所持して
- ⑰ 生と死のきわどい淵を歩くとき
- ⑱ なぜそんなにも安らかに
- ⑲ あなたは美しいのか
- ⑳ しずかに耳を澄ませ
- ㉑ 何かが近づいてきはしないか
- ㉒ 見きわめなければならぬものは目の前に
- ㉓ えり分けなければならぬものは
- ㉔ 手の中にある
- ㉕ 午前八時一五分は
- ㉖ 毎朝やってくる
- ㉗ 一九四五年八月六日の朝
- ㉘ 一瞬にして死んだ二五万人の人すべて
- ㉙ いま在る
- ㉚ あなたの如く 私の如く

③ やすらかに 美しく 油断していた。

(□数字は連番号、○数字は行番号。ともに五十嵐による)

この詩について、作者・石垣りんは次のように述べている。

「私の書いたものが、少しでも世間にとりあげられるきっかけになったのは、この働く者というひとつの立場からでした。第二次世界大戦後、組合運動がさかんになり、その一端として文化活動が強く推進された。(中略) 実際、私も勤め先の職員組合書記局と呼ばれ、明日は広島に原爆が投下された八月六日である。朝、皆が出勤してきて一列に並んだ出勤簿に銘々判を捺す。その台の真上にはる壁新聞に、原爆被災の写真を出すから、写真に添える詩を今すぐここに書いてもらいたい。と言われ、営業時間中、一時間位で書かされたことがありました。(中略) あれはアメリカ側から、原爆写真被災者の写真を発表してよろしい、と言われた年のことだったと思います。」(「ユーモアの鎖国」石垣りん・一九七三年)

つまり、一九五二年八月五日に書かれた詩というこ

とになる。題名の「挨拶」について、作者は、友達に「オハヨウ」と呼びかけるかわりの詩という意味で「挨拶」としたと書いている。

三 「挨拶」の授業① 構造読み

文学教材で何を教えるのかについては、立場や個人によってさまざまである。よく言えば百家争鳴、悪く言えば混乱・混迷。私の場合、大西忠治(一九三〇～一九九二年)の理論と実践に基づいて授業をしている。彼の読み方指導をごく簡潔にまとめて言えば、子どもに「読みのモノサシ」(方法・指標・基準)を教え、それに基づいて作品を読み込ませていくことにより、読みの力をつけていくというものである。したがって、私の授業も読み方を教えることに主眼が置かれている。戦争平和教材を扱うといってもそれは同様であり、特別なことはしない。そのことをまず断っておきたい。

詩の授業は「構造読み」「技法読み」「主題読み」という手順で進めている。まず詩の構造(構成・流れ)を「起承転結」で読み取り、次に表現技法に着目してさらに深く読み取り、最後に「構造読み」と「技法読み」で読み取ったことに題名の読み取りを加えて主題

(テーマ)をまとめさせるのである。

構造読みでは、「起」↓起こり「承」↓承(う)け、「転」↓転化、「結」↓結びだと教え、詩を四つに分けさせる。班討論の後、読みを出させたところ、本年度の授業では次の二案が出た。

A案 起一・二連、承三・四連、転五・六連、結七連

B案 起一・二連、承三・四・五連、転六連、結七連

構造読みのポイントは「転」である。より大きな変化、より多い変化を持つ案が妥当な「転」となる。二つの案から変化を挙げさせてみた。つまり、五連にある変化と、六連にある変化を挙げさせてみたのである。

A案 ・「地球」に話が広がる。

・「原爆」という言葉が初めて出てくる。

B案 ↓・「顔」から「耳・目・手」に変わる

・行が最も多いし(七行)、二十二行目の長さが最長。

生徒の論争では決定打が出ないので、教師が二つの点について助言した。十九行目の「あなた」は誰のことかということと、二十行目の「澄ませ」の活用形は何かということである。

「あなた」は八行目の「友」だということはすぐ出

てくる。となると、三連から五連は「友」の顔についてか述べている、ひとまとまりと考えるのが妥当である。また、「澄ませ」は命令形であり、ここで語り手は行動提起を呼びかけているのである。トーンの変化は明らかである。ところが、ほとんどの生徒は「澄ませ」を連用形のように受けとっている。つまり、「しずかに耳を澄ましながら何か近づいてくる」というように解釈しているのである(ちなみに、正しい連用形は「澄まし」)。

こうして、妥当なのはB案ということを決着した。

この詩の流れをまとめると、起一・二連「原爆の写真」、承三・四・五連「今朝の友の顔」、転六連「行動の呼びかけ」、結「一九四五年八月六日の朝」ということになる。

四 「挨拶」の授業② 技法読み

前述したように読み取りの第二段階は技法読みである。構造読みで全体の流れを読み取った後、細かく詳しく読み取っていくのである。技法を使って普通とは違う言い方にしたということは、特に何かを表現したいからである。したがって、詩に使われている表現技

法を抜き出させ、その部分を読み込んでいくのである。この詩に使われている技法・工夫は次の通りである。

①①あ、(セリフ的表現・読点の使用)

②この焼けただれた顔は

③一九四五年八月六日(西暦の使用)

④その時広島にいた人(体言止め)

⑤二五万の焼けただれのひとつ(体言止め・擬物的表現)

⑥すでに此の世にないもの(漢字書き・体言止め)

⑦とはいえ

⑧友よ(呼びかけ)

⑨向き合った互の顔を

⑩も一度見直そう(呼びかけ・倒置の前半)

⑪戦火の跡もとどめぬ

⑫すこやかな今日の顔(一・二連との対比。「顔」以下同じ)

⑬すがすがしい朝の顔を(対句・倒置の後半・省略)

⑭その顔の中に明日の表情をさがすとき(隠喩)

⑮私はりつぜんとするのだ(ひらがな書き)

⑯地球が原爆を数百個所持して(擬人)

⑰生と死のきわどい淵を歩くとき(隠喩・擬人)

⑱なぜそんなにも安らかに(三十一行目と対応)

⑲あなたは美しいのか(三十一行目と対応)

⑳しずかに耳を澄ませ(命令形)

㉑何かが近づいてきはしないか(擬人的表現・隠喩的)

㉒見きわめなければならぬものは目の前に

㉓えり分けなければならぬものは

㉔手の中にある(二十二行目より対句・隠喩)

㉕午前八時一五分は

㉖毎朝やってくる(擬人的)

㉗一九四五年八月六日の朝

㉘一瞬にして死んだ二五万人の人すべて(体言止め)

㉙いま在る(擬物的表現)

㉚あなたの如く 私の如く(対句・字空け)

㉛やすらかに 美しく 油断していた。(字空け・句点の使用)

これらの技法の裏に隠された意味やイメージの広がりを読んでいくのであるが、最初から最後まで一つずつ読み取っていくのは物理的に不可能である。そこで、普通はその詩全体で最も特徴的な技法、もしくは「転

の技法に焦点を当てて読み取っていく。「転」に着目するのは、詩の主題（テーマ）が色濃く表れるのはやはり「転」だからである。

「転」は五連では近づいてくる「何か」の正体を「毎朝やってくる八時十五分」と関連させて読み取らせる。「何か」は「原爆・核兵器・戦争など」と読み取れることはそれほど難しくはないだろう。事実、どの班も的確に読みを出した。

五 「挨拶」の授業③ 主題（テーマ）読み

一般的に、文学作品の題名は主題を象徴的に表すことが多い。例えば、太宰治の「走れメロス」で「走れ」と命令形になっているのは、多くの存在がメロスに呼びかけていることを表している。それは、身代わりのセリヌンティウスであり、平和を願う民衆であり、人間不信に悩む王・ディオニスであり、約束を守らねばならぬメロス自身であり、すべてを統括する神であり、そして苦悩する作者・太宰なのである。それだけの思いが込められた「走れ」はそうとうに重いものとなる。つまり、「走る」は「生きる」とは人間にとって極めて重いものであることを、この題名は表しているのだ

ある。

さて、「挨拶」である。それは、「毎朝呼びかけるもの、呼びかけられるもの」であり、「毎朝やってくる八時十五分が私たちへの挨拶＝警告だということ」であり、「毎朝の挨拶のように繰り返す口にするべきもの、伝えていくべきもの」なのである。

とすると、構造読み・技法読み・題名読みから、テーマは「核の危機を常に意識し、平和を守るためにできることをやっつけよう」とでもなるだろうか。実際、生徒たちがまとめたテーマもそのようなものだった。

最後に、光村図書のワークブックにあった、世界の国々の核保有数や核拡散防止条約、核兵器禁止条約の資料を紹介した後、次のようなコメントを加えて授業を終えた。

「いいかい、十八歳になったら必ず選挙に行くんだよ。そしてそのときは、平和と民主主義を守る候補者は誰か、政党はどこか、そのことをよく考えて投票するんだよ。」

（いからし あつし・新潟市立月潟中学校）